

琉球大学学術リポジトリ

沖縄における集落の「前」と「後」

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2012-06-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 町田, 宗博, Machida, Munehiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/24814

沖縄における集落の「前」と「後」

町田 宗博

Munehiro MACHIDA

Place-names, "Mee"(Front) and "Kushi"(Back) in Okinawan Village

1. はじめに

名嘉順一(1982)は『沖縄県市町村別大字・小字名集』(昭和51年沖縄県土地調査事務局発行)に記載の全数6859におよぶ原名の語頭の漢字による分類を行っている。その内、方位に関する地名(方位地名)を次のとおり集計している。

前(291), 西(252), 東(239), 後(147) 南(64), 北(35)

これらの方向を示す漢字表記をもつ原名は合計で1028地名におよび、全原名の15%ほどを占めている。このように、語源や場所の象徴的意味を多様を含む沖縄の地名の中で、明瞭に方位や方向を指示するために使用されている地名が多く存在することがわかる。また、これら方位を示すもので南と北が少ない理由を名嘉順一氏は「南の少ないのは沖縄の集落はほとんど南向きだからである。南は前と同じ方向になる。前との関連で南は少なくなったのだろう。北は方言で「ニシ」という。「ニシ」の方言と標準語の西(ニシ)の混同によるもので西の方が多くなってきている」と述べている。

東恩納寛惇(1950)によると、方位に関連した地名について「大字小字等に東西南北の方位に依って構成された地名多い。特にハヘ(南)ニシ(北)の対照が多い。これは、島そのものが南北に長く伸びている事にも由るであろう」と述べている。また「前」という語については「或特殊の目標になる

地物を取って、その境界を表示するために、盛にかつ手軽に使われる。前の代わりに「ニー」と呼ばれる事もある。・・・(中略)・・・前を付けて呼ぶ唱え方は、勿論その付近の住民の通称から出た呼び方であるために、その住居と密接に習合し一種の郷愁を呼び起こす語感をさへともなうものである」という。

このように、沖縄の地名の中で方位地名は頻出しており、その多用さの故であろうか、「前」という地名は郷愁を呼び起こすとも東恩納氏は述べている。

筆者は、これら方位地名の方位を示すという意味が、集落生活における便宜的機能のみならず、沖縄独自の文化的背景に根差して生成されてきたのではないかと考えている。本稿では、方位地名のうち「前」と「後」に焦点をしぼり、その生成の背景について考察することとする。

2. 風水書における「前」と「後」

図1は、石垣市立八重山博物館所蔵識名家文書 の風水書に掲載の図である。同文書は、表紙に與儀兼徳の記載があり、刊本ではなく、写本であり、他の風水書からの写しもしくは風水的知識についての書きつけと思われる。同文書には、「砂飛水走之處絶無抱護之情 則陰宅郷城俱不可建焉 山交水會之處切(有_カ)抱護之情 則陰宅郷城俱可建焉」の記載がある。同治3年(1862)に久米村与儀通事親雲上鄭良佐が記した『北来山風水記』の四村風水記には「夫地理之法、山背水走而無抱護之情、則陰宅郷城俱不可建焉、山交水會而有抱護之情、則陰宅郷城俱可建焉」の記載があり、抱護の情と陰宅・郷城の立地について同様の判断をしていることがわかる。

同図は、整然と家屋が並ぶ住場(集落)を中心に構成され、集落の両側に九曲路が配置されており、九曲路の外側にも少数の家屋が描かれている。集落の下端には緩やかに弧を描く道路が描かれ、眠弓玉帯の記載がある。これは水路とも読み取れるが、九曲路が繋がることから道路として描かれているであろう。これらの外側は樹木によって圍繞されており、玄武、朱雀、青

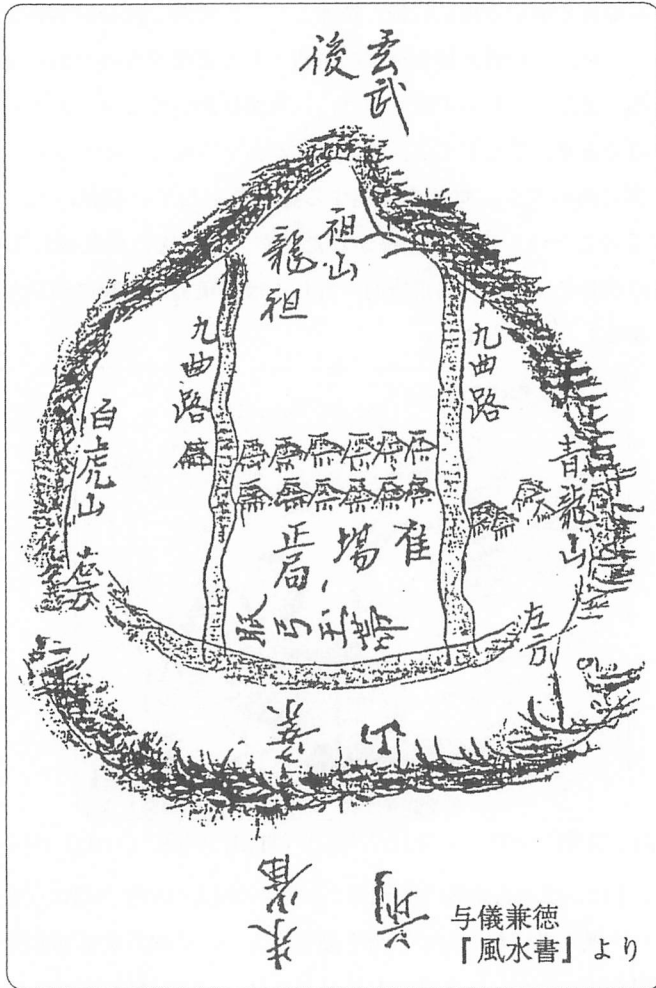


図1 風水書掲載の集落図(町田, 都築(1993)から転載)

龍, 白虎の四神が配されている。また, 玄武には祖山, 龍祖の記載があり, 朱雀には案山の記載がみられる。以上のようにここに描かれた集落は, 樹木によって囲まれた空間である。八重山における明治期作成の絵図には, 集落の周辺を樹木林によって囲繞されたものがみられる(図2)。このことは,

現実世界の地物の中から地図に描く情報として、集落を囲む樹木林が選択された結果であり、この樹木林が地理的情報として重要なものであったことの証左である。また、これらの樹木林は、八重山においてホーゴ、ホーグと称されるものであり、字としては、抱護の字があてられている。さらに、沖縄島や久米島においても、集落を圍繞する抱護林としての松林が知られている。これらのことは、風水書に描かれた図が、単に図上の知識にとどまらず、現実の空間を反映した集落空間、もしくは、現実の空間に適用された集落空間とみることができよう。



図2 故仲松弥秀氏所蔵の八重山古地図（町田，都築（1993）から転載）

以上のように、風水書記載の集落図は近世期の現実の集落空間に反映されたものであり、風水書記載の他の事項を勘案すると、沖縄の集落形態や集落立地の理想型が描かれていると判断して良からう。ここに描かれている集落はその屋敷組から、明らかに仲松弥秀（1963）による「ゴバン型」集落を指している。仲松氏は「ゴバン型」集落の発生を地割土地制度の所産であると考え各集落の形態の分類から1937年以降の発生としている。また、沖縄における集落立地をみると、沖縄島の中南部、琉球石灰岩地域において、南側の緩斜面に集落が立地する類似の立地類型がみられる。これを、石灰岩堤立地型集落と呼ん

でおく。さらに沖縄島北部においては、海岸沿いの集落立地に類似の集落立地がみられ浜堤上に集落が立地している。これを浜堤立地型集落と呼ぶこととする。これらの石灰岩堤立地型集落と浜堤立地型集落に共通するのは集落形態が「ゴバン型」の集落形態をなしているということである。

このように集落形態の類型や集落立地の類型から、これらの集落類型は人間の意思決定の所産であり、計画的設定集落であるといえよう。

またここで留意しないといけないのは、「コバン型」の意味である。この語句は、すでに沖縄の集落を語る場合に慣用化したことばでもある。しかし、図中の九曲路の表現でもわかるとおり、道は直線をなしてはいない。現実のフィールドの経験からも、これら「ゴバン型」集落のほとんどは緩やかな曲線から構成されているといえる。さらに風水書中の道路形態などでも直線を忌み、人間や集落を囲む曲線を吉としている。風水書の形態に対する価値は、直は邪悪なものに対する装置として機能し、決して人間に対して向けてはならぬものである(図3)。人間は、曲の形態で護らねばならないのである。沖縄の「ゴバン型」集落は、ゆるやかな曲線で構成された「ゴバン型」集落なのである。

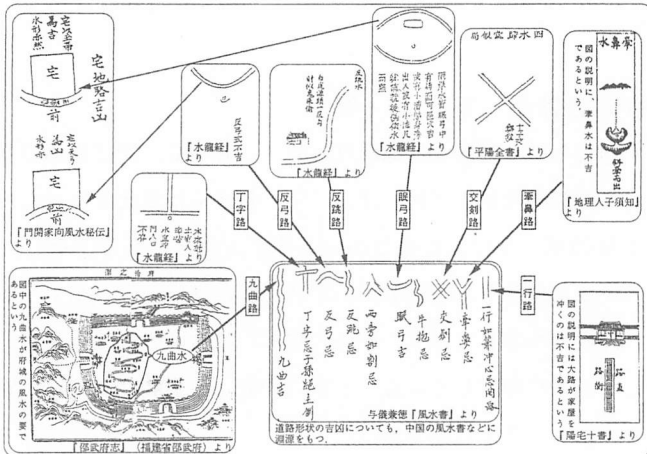


図3 風水書における道路形状の吉凶(町田, 都築(1993)から転載)

このことから、風水書記載の集落図が、沖縄の現実の集落空間と密接な関連をもって描かれていることがわかる。以下では、その他の図に描かれた事項についてみていくこととする。

図1には玄武の横に「後」の字がみえ、朱雀の横には「前」の字がある。さらに眠弓玉帯の両端には、図の右には「左方」の文字が描かれ、図の左には「右方」の文字が描かれている。これらのことは、明らかにこの図は、方向を意識して描かれていることがわかる。すなわち、人間が祖山、龍祖を背後に立ち、案山を見る形である。このことは前述の『北木山風水記』の記述と重ね合わせると、集落の座向を指していることがわかる。これらについては椿・坂本・北野(1997)らによる現実の集落のフィールドワークを踏まえた優れた研究がある。

本稿での筆者の関心は、沖縄の地名における「前」や「後」の使用頻度の高さは、単に便宜的意味のみではなく、このような集落の前と後という集落の軸線方向を示した風水的意味空間に端を発しているのではないかという点にある。

以下では、沖縄の小字名に焦点を絞り、地名の「前」と「後」について考察を行う。

3. 原名における「前」と「後」

明治41年施行の「沖縄県及び島嶼町村制」において、ほぼ集落の空間的領域に整合する沖縄の近世の「村」は、「字」の呼称に変化する。この字の空間領域の下位の単位が原あるいは小字と称する領域である。そしてこの原(小字)の領域に付与された地名が小字名あるいは原名(ハルナー)と呼ばれている。沖縄の小字名(以下、原名と呼称)において、「前」と「後」の名称を冠した地名が頻出している。名嘉(1982)の集計のように、原名において最も多く用いられる名称である。

以下では、これらの原名抽出のための資料を、昭和51年沖縄県土地調査事

務局発行の「沖縄県市町村別大字・小字名集」とした。「前原」、「後原」の名称は、それぞれが単独で一集落の原名の中に対で使用されることも多い。本稿では、集落の前と後という集落の軸線と集落の向きおよび地名との関連について考察することを目的とすることから、「前」と「後」が対で原名として使用されている集落を抽出した。また、前原や後原などの原名が単独でみられる集落は除いている。さらに、ここでの集落や市町村は、昭和51年当時の単位であり、それ以前の集落の統合、再編などは考慮していない。

抽出結果を以下に記す。

「前原」と「後原」が対でみられる集落

名護市 天仁屋

宜野座村 松田

勝連町 南風原、平安名、内間

石川市 東恩納、伊波、嘉手苺、山城、楚南

具志川市 天願、安慶名、上江洲

読谷村 波平、宇座、長浜、楚辺、渡具地

嘉手納町 屋良、野里、野国

北谷町 大村

沖縄市 照屋、安慶田、与儀、登川、泡瀬、高原、松本

北中城村 仲順、和仁屋、渡口、瑞慶覧、安谷屋、萩堂、大城

中城村 伊集、安里、久場、新垣

宜野湾市 野嵩、普天間、喜友名、伊佐、大謝名、嘉数、我如古、宜野湾

浦添市 伊祖、城間、西原

西原町 翁長、掛保久、小那覇、小波津

大里村 高平、稲嶺

南風原町 本部、津嘉山、神里

那覇市 国場、与儀、松川、真嘉比、天久、小禄、大嶺

豊見城村 宜保、我那覇、保栄茂、高安、金良、嘉数、真玉橋、根差部

糸満市 照屋、座波、賀数、大里、真栄平、新垣、伊敷、小波蔵、糸洲、
福地

仲里村 宇江城

「前田原」と「後原」が対でみられる集落

那覇市 安里

名護市 久志

佐敷町 屋比久

南風原 宮城

仲里村 比屋定

「前原」と「東島後原」「西島後原」が対でみられる集落

城辺町 砂川

「前原」と「家後原」が対でみられる集落

伊良部町 佐和田

「島の前原」と「後原」が対でみられる集落

仲里村 比嘉

「村の前原」と「後原」が対でみられる集落

仲里村 山城

「前原」と「後間原」が対でみられる集落

読谷村 喜名

「前」と「後」を示す原名が対で確認できない市町村

久志以外の名護市域、国頭村、大宜味村、東村、今婦仁村、本部町、恩納村、金武町、伊江村、与那城村、東風平町、具志頭村、玉城村、知念村、与那原町、具志川村、

渡嘉敷村、座間味村、粟国村、渡名喜村、南大東村、北大東村、伊是名村、伊平屋村

平良市、下地町、上野村、多良間村、

石垣市、竹富町、与那国町

以上の原名の抽出から次のように言えるであろう。

大きな特色として分布の偏在がみられることである。「前」と「後」の対となる原名は、沖縄島の中部や南部にかけて集中的に分布している。沖縄島北部や宮古、八重山には、一部集落を除いて、「前」と「後」が対でみられる集落はほとんどみられない。このようなきわめて顕著な分布の偏在は地名を生成した文化的・社会的要因の存在があるものと思われる。ここで問題となってくるのは、議論の対象としている原名がいつ付けられたかということである。町田(2004)ではこれに関し、現在につながる原名は、明治32年から36年にかけておこなわれた土地整理事業の地押調査によるものとした。この時に複数の原の統合はあったものと思われる。ただ、この地押調査は、すでにその時点までには存在していた首里王府作成の資料を参照していたものと思われ、地域住民を交え現地調査を踏まえたものである。地名設定について明示した資料は管見の限り見つからないが、ほぼ土地整理事業の時期までには存在した原名が、その後の原名としても使用されていったのであろう。

それでは、「前」と「後」が対となった原名の分布の偏在に対する、社会的・文化的要因はどのように説明されるのだろうか。

筆者は、作業仮説として、文化圏論的現象が地名に表れているのではないかと考えている。すなわち、「ゴバン型」集落と称される風水の計画設定集落の設置が進行する中で、集落の軸方向をさす「前」と「後」が原名として残っているのではないかということである。その影響圏が「前」と「後」の対となる原名の分布の偏在として表出しているのではないだろうか。それは、「ジュルクニチー」と「清明祭」の分布の相違、「殿」と「アシャギ」の分布の相違と類似の要因が存在するのではないかとも考えている。

4. おわりに

本稿でみてきたように、風水書における向きをともなった集落の理想型は、現実の集落空間に反映されている。筆者は、これら集落の向きにおける軸線と原名における「前」と「後」との関連性を指摘した。この原名の分布を沖縄県全域において考察すると、沖縄島の中部から南部にかけて集中しており、分布の偏在がみられる。これは、文化圏論的要因が背景にあるのではないかと考えている。

個々の集落における「前」と「後」の空間的配列や、原名の生成の背景については、今後とも課題としたい。

【付記】

本稿の骨子は、2004年度南島地名研究センター大会（於：那覇市首里公民館）において発表したものである。

文献

- 沖縄県土地調査事務局（1976）『沖縄県市町村別大字・小字名集』
椿勝義，坂本磐雄，北野隆（1997）集落の風水史料及び古地図に基づく八重山地方の集落座向，日本建築学会計画系論文集，500，213-220。
名嘉順一（1982）沖縄の地名ハルナーについて，『琉球の言語と文化 仲宗

根政善先生古希記念』, 171-183.

仲松弥秀 (1963) 沖縄の集落-平民百姓村の景観的研究-, 琉球大学文理学部
紀要人文・社会, 7, 123-175.

東恩納寛惇 (1950) 『南島風土記』, 1974沖縄郷土文化研究会復刻版.

町田宗博, 都築晶子 (1993) 「風水の村」序論-『北木山風水記』について
-, 琉球大学法文学部紀要史学・地理学篇, 36, 99-213.

町田宗博 (2004) 沖縄における明治期土地整理事業と原名, 琉球大学法文学
部人間科学科紀要, 14, 39-54.